『藤原義孝集』と『源氏物語』

呉羽　長

富山大学人文学部紀要第62号抜刷
2015年2月

『藤原義孝集』と『源氏物語』

呉　羽　長

一　引用の認定

本稿は、『源氏物語』が『藤原義孝集』歌を引用する実態を捉えその特質を明らかにしようとするものである。『義孝集』は全歌八〇首（九州大学細川文庫本の場合）ほどの家集であり、それが『源氏物語』に引用される例は多いとはいえないが、その例から両作品の関係を見ることにより、『源氏物語』が先行の歌を取り入れる姿勢の一端を窺うことができると考える。

『源氏物語』の引歌に関する諸注の指摘を網羅した伊井春樹氏編『源氏物語引歌索引[1]』「和歌歌謡索引」の中で、『義孝集』歌を引用したものとして指摘がある『源氏物語』中の記事は、義孝歌八首に対して一〇箇所を数える。以下に右『引歌索引』に示された『義孝集』歌の『源氏物語』引用を、同物語の巻序に従って①～⑩として示す。その本文及び歌番号は『私家集大成』所収本（底本は九州大学細川文庫本）のそれに拠る。源は『源氏物語』の引用箇所であることを示し、その掲出した本文の記述の下の（　）内の数字は、新編日本古典文学全集『源氏物語[2]』（小学館）のページ数を示す。頭に義を付した歌は『義孝集』の歌である。また『引歌索引』を増補した『角川古典大観源氏物語[3]』「引歌索引」により、その引用を指摘する古注旧注を〔　〕内に略号で掲げる。略号の示された書名の掲出は注に譲る[4]。

①源　よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさるなでしこの花（「紅葉賀」巻三三〇ページ）
義73よそへつゝみれと　つゆたになくさますいかゝはすへきなてしこのはな
〔花・休・紹・孟・岷・湖・引・拾・新・余・事・集・大島〕

②源　御枕などもさながら二三日見たてまつりたまへど（「葵」巻四六ページ）
義75しかはかりちきりしものをわたりかはかへるほとにはわするへしやは
〔岷〕

③源　時雨うちして荻の上風もただならぬ夕暮に（「少女」三四ページ）
義4秋はなをゆふまくれこそたゝならねおきのうはかせはきのしたつゆ
〔前・奥・紫・異・河・休・紹・孟・岷・湖・引・全・対・事・大・評・集・大島〕

④源　（「）その中に情棄てずおはしませば」など、いとようすかしたまふ（「行幸」三二三ページ）
義15わすれてもあるへきものをこのころは月よゝいたく人なすかせそ
〔拾・余〕

⑤源　忘れなむと思ふもものの悲しきをいかさまにしていかさまにせむ（「藤袴」巻三四五ページ）
義19わするれとかくわするれとわすられすいかさまにしていかさまにせん
〔花・紹・孟・岷・湖・引・新・全・対・事・大・評・集・大島〕

⑥源　一日はつれなし顔をなむ。めざましう、と（「若菜上」巻一四九ページ）
義46わひぬれはつれなしかほはつくれともたもとにかゝるあめのわひしさ
〔河・紹・大島〕

⑦源　風の音さへただならずなりゆくころしも（「幻」巻五四三ページ）
義4秋はなをゆふまくれこそたゝならねおきのうはかせはきのしたつゆ

〔河・弄・一・休・紹・孟・岷・引・全・対・大・評・集・大島〕

⑧源　若き心地にはひとへにものぞおぼえける。あさましきまで恨み嘆けば（「竹川」巻八四ページ）

義54みをつみてなかゝらぬよをしる人はひとへに人をうらみさらなん

〔引〕

⑨源　乳母は、なかなかものもおぼえで、ただ、「いかさまにせん、いかさまにせん」とぞ言はれける。（「蜻蛉」巻二〇二～三〇三ページ）

義19わするれ（れぬを）とかくわするれとわすられすいかさまにしていかさまにせん

〔引・大島〕

⑩源　「まづ開けよ」とのたまふ声、いとようまねび似せたまひて忍びたれば（「浮舟」巻一二四ページ）

義18あやしくもわれ（かぬれ）またきぬをきたるかなみかさのやまを人にから（く）れて

〔一・湖〕

以上①～⑩が『源氏物語引歌索引』の指摘する引用箇所であるが、ここに示した一〇項の全てが厳密に『義孝集』からの「引用」と認定できるものではない。『源氏物語事典』中の「所引詩歌仏典5」では右の①～⑩のうち①③⑤の三例を引歌と認め、鈴木日出男氏『源氏物語引歌総覧6』では①③⑤⑦を引き歌と認めている。なお、『総覧』では上記の四例に加え、『義孝集』四番歌「あきはなを（正しくは「なほ」。以下「なを」と掲出する）」の歌に対する「真木柱」巻末の記述「物の音など調べ、なつかしきほどの拍子うち加へて遊ぶ、秋の夕のただならぬに」（新全集三九八ページ）の計五例を引歌と認めている。この「真木柱」巻の記述を⑪として、①～⑪を吟味することにする。

十一箇所のうち、まず②は『岷江入楚』にのみある指摘であるが、『源氏物語』「葵」巻で、亡者が二三日は生き返ることがあることから、葵上の死の作法を二、三日行わなかったことについて、『義孝集』七五番歌を踏まえるとする。同歌詞書にあるよう、義孝が死に際して「しぬへき心ちのするかな、しぬるかさなりともしはしはとかくなせそ、誦経し（経すこしょみイ）はてんの心はへり」と言ったのを妹女

御が忘れて義孝の葬儀に向けて作法をしてしまい、彼は此岸にあるうちに誦経できなかった。この逸話を「葵」巻が踏まえたと指摘するものであるが、『義孝集』七五～七七番歌は『源氏物語』成立時に『義孝集』中に付されていたか疑わしいこともある上、そうした葬儀の作法については『義孝集』の記事に先例を求めるに限らず、蘇生の可能性を考え息を引きとってしばらく葬儀を待つことはありうることで、あえて『義孝集』を踏まえたとするには当たらない。

④⑥⑧は、それぞれ「すか（す）」（④）、「つれなしがほ」（⑥）、「ひとへに」「恨み」（⑧）という語が重なることから引用と捉えられたものであるが、重なる語（単語・文節）は一、二語に限られ、とりたてて『義孝集』を意識したものとはいえない。

⑨は「蜻蛉」巻で、「乳母は、なかなかものもおぼえで、ただ、「いかさまにせむ、いかさまにせむ」とぞ言はれける。」とあり、「いかさまにせむ」という印象度の強い語の使用からして『義孝集』からの引用とも思えるが、別に『異本紫明抄』『花屋抄』では出典未詳として「いかさまにせんせんとこそいはれけれ世の憂き時のひとりごとには」という歌を挙げる。双方を比較して、『異本紫明抄』等の方が「いはれけ（れ）」とも重なり、また乳母の言は「ひとりごと」でもあり、妥当な指摘と考える。なお、河内本系統や別本系の保坂・陽明の各本文ではこの箇所、「めのとはなか〳〵ものもおほえてたゝいかさまにせん〳〵とそいはれける」となっており、あとの「〳〵」を「せん」と読んで「いかさまにせんせんとぞいはれける」とした可能性も考えられ、その場合、『異本紫明抄』『花屋抄』の指摘の引歌本文と更に重なることになる。

⑩の例については、義孝が近衛府の上司（兵部卿宮致平親王）に彼の名を使われて愛人のところを訪ねられたことがあり、そのことをもって親王を責めるのが「あやしくも」の歌で、その出来事を、『源氏物語』「浮舟」巻で匂宮が薫と装って浮舟に侵入する筋立てに引かれたとするものである。これを引用とする指摘は『一葉抄』『湖月抄』のみであるが、実際に義孝の愛人に対し致平親王が匂宮のように浮舟への押し入りのような行為を行ったとは考えられず、遊び心をもったあいさつ程度のものであったと思われ、義孝歌と「浮舟」巻の記事双方の間に言葉の重なりもないことから、引用とは考えない。

一方、①の『義孝集』の「よそへつつ」の歌は、「紅葉賀」巻源氏の歌と、「よそへつつ見る」「慰（まで）「露（けさ）」「なでしこの花」という歌語が共通する。また、

③は「おぎのうは風」「ただなら（ぬ）」「夕（ぐれ）」という三語と重なり、『源氏物語』では義孝歌を意識したものであると認めてよいと考える。

⑤は「わすれ（なむ）」の語及び歌の下句「いかさまにしていかさまにせん」という印象度の強い語が重なっており、引用と認める。

⑦は「風」「ただならず」が重なり、秋の情趣を生かすものとして義孝歌の引用とする。

⑪「秋」「夕べ」「ただならぬ」が重なり、⑦と同様「真木柱」巻のこの場面で秋のしめやかな雰囲気を背景に求める箇所でもあることから、引用と認める。

以上から、引用と認定できるのは、①③⑤⑦および⑪の例であり、『義孝集』三首に対する『源氏物語』五箇所の記事である。このうち③⑦⑪は『義孝集』四番歌の「秋はなを」を踏まえたものであり、他の①と⑤の二首は別の共通する特徴が見出せる。以下にそれぞれの引用について吟味を行う。

二　認定した引用の特徴

(1)「秋はなを」の歌の引用

③⑦⑪は『義孝集』四番歌「秋はなをゆふまくれこそたゝならねおきのうはかせはきのしたつゆ」の歌を引くものである。この歌は現存『清慎公集』（藤原実頼の家集）にも載せられるが、『清慎公集』中で『義孝集』と重複する歌が、鎌倉期にまとまって入っていて『義孝集』歌が混入したものであることを竹内美千代氏が明らかにしており[7]、もともと『義孝集』にあった歌と解せられる。よって『清慎公集』にある『義孝集』との重複歌は考察の対象としない。

この『義孝集』四番歌は『和漢朗詠集』（上・秋興）収載の歌でもある。『源氏物語』が書かれた当時、より広く読まれていたのは『和漢朗詠集』であったろう。『源氏物語』における『和漢朗詠集』中の和歌等の引用は、『源氏物語事典』「所引詩歌仏典索引」の「出典索引」によると四二例を数える。『源氏』作者にとって身近にあった詩歌集であった。同『事典』での『義孝集』引用の指摘は三例に留まる。

③は右「秋はなを」の歌を『源氏物語』「少女」巻が引いたものである。「少女」巻第一年の秋のこと、前斎宮（秋好）の立后がなされた後、内大臣（「帚木」巻の頭中将）が大宮邸に訪れ、雲居雁に琴を奏でさせながら宮の前で光源氏方に圧倒される一門の衰運を語る。その「少女」巻中の該当箇所を一文を掲げて示す。

所どころの大饗どもも果てて、世の中の御いそぎもなく、のどやかになりぬるころ、時雨うちして荻の上風もただならぬ夕暮に、大宮の御方に内大臣参りたまひて、姫君渡しきこえたまひて、御琴など弾かせたてまつりたまふ。

この記述について、鈴木日出男氏は、

物語では、さらに「時雨うちして」とあり、晩秋が強調される。この情趣のなかで、久方ぶりに対面する内大臣・大宮の、わが一門の命運を語る対話が展開される。太政大臣逝去後の衰運を思う気持も、右の情趣にふさわしい。

と述べる[8]。秋の情趣がこの歌により確保されているといえる。この後内大臣は女房たちの話を立ち聞きし雲居雁と夕霧が親しくしていることを知る。「ただならぬ」からは、事件の起こる兆しを読みとることができる。

この歌では対句的に「荻の上風」「萩の下露」が使われ、語調の良い歌と指摘があり[9]、情趣に加え語調の良さが『源氏』作者に多用させたものであろう。

⑦の「幻」巻の記述は、紫上の死の翌年八月の記述として

風の音さへただならずなりゆくころしも、御法事の営みにて、朔日ごろは紛らはしげなり。今まで経ける月日よと思すにも、あきれて明かし暮らしたまふ。

とある。紫上を失って孤愁を生きる源氏が、風の音のただならぬ乱れに、紫上の一周忌の準備をしつつ時の経過に慨嘆する様子を捉える。荻を吹く風、萩に置く露のさびしいたたずまいを背景にするものである。

また⑪の「真木柱」巻の記述についても「秋はなを」の歌を引くと認められる。同巻末、弘徽殿女御のもとに殿上人が参り集い管弦の遊びがなされる様子として「秋の夕のただならぬに」と描写され、そこへ夕霧も加わって女房たちと洒脱な会話が交わされる。きまじめな夕霧の登場に、深まりゆく秋の情趣を誂えたものと解せられるが、その時奥から近江の君が介入し、彼に懸想の歌を詠みかける。

ここで近江の君に道化的役割を演じさせそれに夕霧詠歌をもってたしなめることで「玉鬘」巻以来の玉鬘をめぐる物語の決着がつけられることになるが、近江の君の登場の場違いさを際立てるのに「あきはなを」の義孝歌が示すしめやかな雰囲気が有効であったといえる。

(2) 「よそへつつ」「わすれなむ」の歌の本歌的受容

①⑤は『源氏物語』の作中人物が義孝歌を踏まえて歌を詠み出す形で引用がなされるものである。

まず⑤について見るが、ここでの義孝歌は、「同じ人に久しく絶えて」という詞書を付して「わするれとかくわするれとわすられすいかさまにしていかさまにせん」とあるが、これを受けて「藤袴」巻では、

式部卿の宮の左兵衛の督は、殿の上の御兄弟ぞかし。親しく参りなどしたまふ君なれば、おのづからいとよくものの案内も聞きて、いみじくぞ思ひわびける。いと多く恨みつづけて、

忘れなむと思ふものの悲しきをいかさまにしていかさまにせむ

紙の色、墨つき、しめたる匂ひもさまざまなるを、人々もみな、「おぼし絶えぬべかめるこそ、さうざうしけれ」など言ふ。宮の御返りをぞ、いかが思すらむ、ただいささかにて、

心もて光にむかふあふひだに朝おく霜をおのれやは消つ

とほのかなるを、いとめづらしと見たまふに、みづからはあはれを知りぬべき御気色にかけたまへれば、露ばかりなれど、いとうれしかりけり。かやうに、なにとなけれど、さまざまなる人々の、御わび言も多かり。

と描かれる。式部卿宮の子息左兵衛督が、内大臣北方の兄弟という縁で玉鬘に懸想をしていて、尚侍になろうとする彼女と仲が疎くなることを嘆く歌を詠んで送ってきた。鈴木日出男氏は「特に、下の句の「いかさまにしていかさまにせむ」に、この歌本来の、絶望的に恋へのいらだたしさが言いこめられている[10]。」と評するが、その「いらだたしさ」の訴えの直截性を義孝歌上句が示している。一方『源氏物語』の場合、左兵衛督の詠む上句はそうした直情性をより抑制して悲しみを訴えている。それにしても上句の「忘る」ことを努めつつそれができない心の内を、下句全体を踏襲することで示す詠法は、『義孝集』歌への依存の度合いの強さを示す。

①は、「紅葉賀」巻に次のようにある。

御前の前栽の、何となく青みわたれる中に、常夏のはなやかに咲き出でたるを折らせたまひて、命婦の君のもとに書きたまふこと多かるべし。

よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさるなでしこの花

ここで「よそへつつ」の歌は、源氏が若宮（冷泉）を抱く桐壺帝・藤壺の前から退き、藤壺への思慕を押さえきれないまま自邸二条院に帰り、前栽に咲く撫子の花を見て彼女への文の中に詠み入れた歌である。「若宮を藤壺によそへてみると云歌の心也」と『孟津抄』にある。これは『義孝集』の七三番歌

母上、東宮にさぶらひ給ひしに、いとまにて久しうまゐり侍らざりしかば、なでしこに付けてたてまつりし、母上

よそへつゝみれと つゆたになくさますいかゝはすへきなてしこのはな

を受けている。この、わが子義孝と会えない母親の歯がゆい心を詠み入れる歌と「紅葉賀」巻①の記事の重なりについては前節に示したが、その度合いは高く、歌全体の趣向も同じといえる。鈴木日出男氏は

源氏の歌では、「なでしこの花」をわが子、不義の子になぞらえている。そして、もとの歌に「つゆなぐさまず」とあるのを、「露けさまさる」と転じた。わが子を花となぞらえようとするが、なぞらえきれない悲しみの涙の表現へと転じているのである[11]。

と指摘するが、なぞらえきれない悲しみを藤壺に訴えながら奥に彼女その人に対する思慕をこめているといえる。

このような①⑤の例では、『源氏物語』は『義孝集』歌の一部引用に止まらず、むしろ『義孝集』当該歌全体の趣意を生かして、変形は一部のみに限って作品内に取り入れている。

そのような傾向を更に推し進めれば歌全体を物語内に用いることになる。「空蟬」巻の末尾で空蟬は「空蟬の羽におく露の木がくれて忍び忍びにぬるる袖かな」（一三一ページ）と詠むが、この空蟬の歌は、『伊勢集』四四二番歌「うつせみの羽におくつゆの木がくれてしのびしのびにぬるる袖かな」をそのまま作品内に利用しており、右の⑤、①はその引用の形に繋がるものといえる。

ただし『義孝集』歌引用の場合、同家集歌の「わするれど」（⑤）にしても「よそへつゝ」（①）にしてもその真率な心情の露わな表

明を押さえて、『源氏物語』ではその文脈に相応しい形での提示がされている。義孝のもつ純な直情、彼と会いたいと思う母の真情をそのまま受けて作中人物に表明させることはせず、物語の文脈の中でそれぞれの人物の背負う状況に合わせて変形するという配慮がなされている。

なお、『源氏物語』でこうした重なりの度合いの大きい引用例としては、次のａ～ｄのような歌があげられる。頭に源とあるのは『源氏物語』中の歌、「・」として示した歌が『源氏物語』の引用した本歌にあたる。本歌の掲出は『総覧』に示された歌本文に従う。

ａ源手を折りてあひみしことを数ふればこれひとつやは君がうきふし（「帚木」巻七四ページ、左馬頭の歌）
・手を折りてあひみしことを数ふれば十と言ひつつ四つは経にけり（『伊勢物語』第十六段）

ｂ源もの思ふと過ぐる月日も知らぬ間に年もわが世も今日や尽きぬる（幻巻五五〇ページ、源氏の歌）
・もの思ふと過ぐる月日も知らぬ間に今年は今日に果てぬとか聞く（『後撰和歌集』冬五〇六藤原敦忠）

ｃ源見し人もなき山里の岩垣に心ながくも這へる葛かな（「総角」巻二九七ページ、宮の大夫の歌）
・見し人も忘れのみゆくふる里に心長くも来たる春かな（『後拾遺和歌集』雑三・一〇三五、藤原義懐）

ｄ源大空の月だにやどるわが宿に待つ宵すぎて見えぬ君かな（「宿木」巻四〇一ページ、夕霧の歌）
・大空の月だに宿にいるものを雲のよそにも過ぐる君かな（『元良親王御集』）

『新編国歌大観』を検索して確認すると、本節(1)に見た義孝歌「秋はなを」が『和漢朗詠集』に載せられているとはいえ、「わするれど」「よそへつつ」の二首は『源氏物語』と同時代以前の他の作品に採られていない[12]ことから、『源氏物語』作者は当時「義孝歌集」として纏まっていた歌集などから歌を引用した可能性が高い。「わするれど」「よそへつつ」の歌が「義孝歌集」を参照していたとすると、さきに『和漢朗詠集』からの引用の可能性を指摘した「秋はなを」歌も義孝の家集を見てのものだったとも考えられる。

義孝歌は純な情熱の吐露とストイックさが特徴といえる。⑤の「わするれど」は若者の情熱の直接的吐露が目立つ。①は義孝の母上の歌であるが、これも切実な思いが見られる。『源氏物語』はそうした当該家集歌の特質を捉えながら、それを物語文脈の中にふさわしく抑制的な内実にして生かしていることが認められる。⑤の義孝歌ののたうつような恋の情意に対して、左兵衛督は同様の純な思い

を一度客観化して自らを見直した上、「いかさまにしていかさまにせん」と下句に繋げている。①も「いかゝはすへき」を「露けさまさる」と変えることで悲しみを自らに捉え直して深みのあるものにしている。このように『源氏物語』が直情を抑制しつつ悲しみを奥深くするのは、引用をめぐる『源氏物語』の特徴的あり方であったと捉えられる。鈴木日出男氏は、『源氏物語』作中の和歌への引用について、

和歌同士の関係でいえば、和歌ならではの類同の型を共有しあっている点で、いわば類歌の関係にもなっている。しかし、引き歌→物語の歌は単なる模倣などではない。むしろ、後世の本歌取と似てなくもない。しかし何よりも注意されるのは、物語の文脈の中で奥行のある表現力を発揮している点である[13]。

と指摘する。『義孝集』歌の引用例についても、同様の姿勢が見られるといえるが、奥行のある表現力の内実については、右の抑制的操作という点を含めてなお考察の余地があるように思う。

三　藤原義孝像と『源氏物語』

前節末で、これまで見てきた三首が同時代の他作品に掲載されていない状況から、『源氏物語』作者は、「義孝歌集」として纏まった歌の集成中の歌を見て引用を行った可能性が高い、と述べた。その場合、『源氏物語』創作・成立時の「義孝歌集」の様態について解明しなければならないところだが、現在のところそれがかなわず、仮に現存『義孝集』のもとになったものとして粗々想定しおきたい。田坂憲二氏によると、『拾遺集』『栄花物語』に引用される『義孝集』歌は今日の特定の伝本との関係は見出しがたいのに対し、『後拾遺和歌集』では明らかに正安本の本文に依拠しており、系統の分化はこの頃であったとしている[14]。その正安本系統では、

73よそへつゝみれと　つゆたになくさますいかゝはすへきなてしこのはな
　御返し
74しばしだにかげにかくれぬほどはなほうなだれぬべしなでしこのはな

という義孝母君と義孝の贈答は、三二・三三番の位置にあり、他の『源氏物語』に引用された義孝歌同様同本の前半部にある。『源氏物語』作者が参照した「義孝歌集」は現存家集より小規模なものであったとすると、「よそへつゝ」歌が増補的に集の後ろに置かれた形の九州大学蔵本よりも、前半にその歌を置く正安本に近いものであったのかもしれない。また、巻末の義孝往生説話はその段階で付されていたことには疑問があり、彼の夭亡をめぐる『義孝集』七五～七八番歌について、田坂氏は、それ以前と成立の次元を異にし『後拾遺集』成立前後の頃の付載と推測する[15]。こうした本文を参照したものとして受容の実体を捉えなければならないところであろう。ただし、『源氏物語』作者はその段階の「義孝歌集」をもって義孝歌を見たことに加え、義孝という一人の人間を意識しその生涯の姿を受け止めていたという点も考慮すべきではないか。その際彼の逝去をめぐる記事内容及び『大鏡』などに載せられている逸話などは、当時も何らかの形で伝えられ、『源氏物語』作者の知るところであったと思われる。

義孝は天禄三（九七二）年十一月一日の父伊尹の薨去を機に、

春人のよめといひしに

9夢ならてゆめなることをなけきつゝ　はるのはかなきものをもふかな

11はる〳〵のはなをあたにとみしものを　むかしの人のゆめこゝちする

などの厭世観のこもった歌を詠み、またその悲しみを外界の景物と響き合わせ

43ゆくかたもさだめなきよにみづはやみうぶねをさをのさすやいづこぞ

かはぎり

44よをさむみたつかはぎりもあるものをつくづくきゐるちどりかなしな

という、澄明さを湛えた歌を詠んでいるが、こうした悲哀感に満ちた歌の世界に加え、義孝の突然の疱瘡発病と死の経緯や、生前の求道的な姿などが一つの人格に統合され、彼の花のある、しかしストイックな生き方を貫く人間的魅力が『源氏物語』作者に受け止められていたことが推測される。

義孝の日常の禁欲的な生の姿は『大鏡』に見られ、例えばそこには、ある夜例ならず宮中で女房たちと語り合って時を過ごした彼が

世尊寺に帰り、深更西に向かって読経し額づく姿が綴られている。

世の常の君達などのやうに、内わたりなどにて、おのづから女房と語らひ、はかなきことをだにのたまはせざりけるに、いかなる折にかありけむ、細殿に立ち寄りたまへれば、例ならずめづらしう物語り聞こえさせけるが、やうやう夜中などにもなりやしぬらむと思ふほどに、立ち退きたまふを、いづ方へかとゆかしうて、人をつけたてまつりて見せければ、北の陣出でたまふほどより、法華経をいみじう尊く誦じたまふ。大宮のぼりにおはして、世尊寺へおはしましつきぬ。なほ見ければ、東の対の端なる紅梅のいみじく盛りに咲きたる下に立たせたまひて、「滅罪生善、往生極楽」といふ、額を西に向きて、あまた度つかせたまひけり。帰りて御有様語りければ、いといとあはれに聞きたてまつらぬ人なし。（一七八～一七九ページ[16]）

このような逸話内容が『源氏物語』の時代にも伝わっており、作中人物の生き方に影響を与えていることが考えられる。例えば薫は「匂兵部卿」巻で自分の出生に漠然とした疑問を持ち、

中将は、世の中を深くあぢきなきものに思ひすましたる心なれば、なかなか心とどめて、行き離れがたき思ひや残らむなど思ふに、わづらはしき思ひあらむあたりにかかづらはんはつつましくなど思ひ棄てたまふ。（二九ページ）

とあるよう、世の中を無常なものと悟る故に、女性に執着することを控えようとし、何事にも抑制的に振舞う。

心にまかせてはやりかなるすき事をさをさ好まず、よろづのこともてしづめつつ、おのづからおよすけたる心ざまを人にも知られたまへり。（三〇ページ）

このような設定の上で、彼は女三宮の死までという枠の中でストイックに在俗の生活を続ける[17]。この当初の人物設定故に、宇治の姫君に対してもその恋は、出離までの心の平静さを保とうとするため抑制的で、この後、大君・浮舟と、その恋を失わざるを得ない。そうした薫の精神性に、父伊尹を亡くして厭世感を深め、一方で純な恋心を吐露しつつ、出自の高貴さに支えられて独自な魅力を湛える義孝の姿が影響を及ぼしているのではないか[18]。

義孝の人間的特性の『源氏物語』への影響については、今は指摘に留め、『源氏物語』成立時の『義孝集』の様態の解明などと共に、今後の課題としたい。

注

1　伊井春樹氏『源氏物語引歌索引』（昭和五二（一九七七）・九、桜楓社）。本索引では和歌の出典を示す際に『国歌大観』正続に拠っているが、本稿で出典として『藤原義孝集』歌を示す場合、『私家集大成』所収本（九州大学細川文庫本を底本とする）の本文及び歌番号に従う。

2　本稿で『源氏物語』本文を引用する際も、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男の各氏校注・訳新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）に拠る。

3　伊井春樹氏『角川古典大観源氏物語』（ＣＤ－ＲＯＭ）（平成一一（一九九九）・一〇、角川書店）。

4　略号をもって示した注釈書の名称は、以下の通りである。（3）による。

釈前＝源氏釈（前田家蔵、『源氏物語大成』所収）／奥＝奥入（『源氏物語大成』所収）／紫＝紫明抄（京都大学蔵、『紫明抄河海抄』角川書店）／異＝異本紫明抄（宮内庁書陵部蔵・ノートルダム清心女子大学蔵、未刊国文古註釈大系、古典叢書）／古＝源氏物語古註（未刊国文古注釈大系）／河＝河海抄（『紫明抄河海抄』角川書店）／花＝花鳥余情（源氏物語古注集成『松永本花鳥余情』桜楓社）／弄＝弄花抄（源氏物語古注集成『弄花抄』桜楓社）／一＝一葉抄（源氏物語古注集成『一葉抄』桜楓社）／休＝休聞抄（源氏物語古注集成『休聞抄』桜楓社）／紹＝紹巴抄（翻刻平安文学資料稿『源氏物語紹巴抄』）／孟＝孟津抄（源氏物語古注集成『孟津抄』桜楓社）／屋＝花屋抄（未刊国文学古注釈大系）／岷＝岷江入楚（源氏物語古注集成『岷江入楚』桜楓社）／湖＝湖月抄（『増補源氏物語湖月抄』名著普及会）／引＝源氏物語引歌（宮内庁書陵部蔵）／拾＝源註拾遺（『契沖全集』岩波書店）／新＝源氏物語新釈（『賀茂真淵全集』続群書類従完成会）余＝源注余滴（国書刊行会叢書）／全＝日本古典全書源氏物語（朝日新聞社）／対＝対校源氏物語新釈（平凡社）／事＝源氏物語事典（「所引詩歌仏典」東京堂）／大＝日本古典文学大系源氏物語（岩波書店）／評＝源氏物語評釈（角川書店）／集＝日本古典文学全集源氏物語（小学館）／大島＝大島本源氏物語（影印本、角川書店）

5　池田亀鑑氏編『源氏物語事典下巻』（昭和三五（一九六〇）・三、東京堂出版）の「所引詩歌仏典」。

6　鈴木日出男氏『源氏物語引歌総覧』（平成二五（一九五〇）・五、風間書房）「源氏物語引歌索引」。

7　竹内美千代氏「清慎公集と義孝集」（『樟陰文学』十三号、昭和三六（一九六一）・一〇）ほか。

8　注6に示した鈴木日出男氏の著書の当該歌解説。

9　川口久雄氏『和漢朗詠集全訳注』（昭和五七（一九八二）・二、講談社）。

10　注6に示した鈴木日出男氏の著書の当該引用解説。

11　注6に示した鈴木日出男氏の著書の当該引用解説。

12　「秋はなほ」の歌は『和漢朗詠集』及び鎌倉期説話集の『撰集抄』に義孝作としてあるが、「わするれど」「よそへつつ」の歌は『源氏物語』同時代までの他作品に採られず、わずかに「よそへつつ」の歌が『新古今和歌集』に見られるのみである。

13　鈴木日出男氏「源氏物語の引歌について」（『源氏物語引歌総覧』所収）。

14　田坂憲二氏「『義孝集』本文考（二）」（田坂憲二氏・田坂順子氏編著『藤原義孝集』昭和六二（一九八七）・一二、和泉書院）。

15　田坂憲二氏注14に掲げた論文。

16 『大鏡』本文の引用は、橘健二氏・加藤静子氏校注・訳新編日本古典文学全集『大鏡』（小学館）に拠る。

17 拙論「薫造型の方法――「宿木」巻を中心に――」（『源氏物語の創作過程の研究』平成二六（二〇一四）・一〇、新典社の第十七章）を参照いただきたい。

18 また、『大鏡』に、殿上の逍遙の際のこととして、

　また、殿上の逍遙はべりし時、さらなり、こと人は皆、こころごころに狩装束めでたうせられたりけるに、この殿はいたう待たれたまひて、白き御衣どもに、香染の御狩衣、薄色の御指貫、いとはなやかならぬあはひにて、さし出でたまへりけるこそ、なかなかに心を尽くしたる人よりはいみじうおはしましけれ。つねの御ことなれば、法華経、御口につぶやきて、紫檀の数珠の、水精の装束したる、ひき隠して持ちたまひける御用意などの、優にこそおはしましけれ。（一八〇～一八一ページ）

とあり、それが次の「花宴」巻の源氏の姿に生かされているのではないかと推測されるところである。

　御装ひなどひきつくろひたまひて、いたう暮るるほどに、待たれてぞ渡りたまふ。桜の唐の綺の御直衣、葡萄染の下襲、裾いと長く引きて、皆人は袍衣なるに、あざれたるおほきみ姿のなまめきたるにて、いつかれ入りたまへる御さま、げにいとことなり。花のにほひもけおされて、なかなかことざましになん。（「花宴」巻三六四ページ）

　右大臣の家の藤花の宴に招かれて出かけた際の源氏の装いは、しゃれた略装で、それがかえって源氏の優雅な美しさを引き立てることになった。「待たれてぞ渡りたまふ」は、義孝が「この殿はいたう待たれたまひて」とあることと重なる。この宴の後源氏は朧月夜との再逢を果たすことになる。